Newsletter

2016 | 春 |

特定非営利活動法人ジェン
Vol.64

JEN
Japan Emergency NGO

もっとしなやかなコミュニティを。

紛争や自然災害で、多くの物を失っても
私たちは暮らしを回復できる
自然治癒力を生まれながらに持っています。
仲間と考え、思いやり、
励まし合うことで
コミュニティは再び輝きを取り戻します。
それを支えるのが
JENの自立支援です。

往復書簡

事務局長木山啓子とJENスタッフの
パキスタン ⇄ 日本
oufuku syokan

Airmail

啓子さんへ

2005年に誕生した私たちパキスタンチームは今、首都イスラマバードにあるオフィスを拠点に、戦闘を逃れ避難民となっている人びとを支援しています。この10年の間に築き上げた抜群のチームワークが自慢です。私がJENに共感したのは、世界の人びとが平等の機会、権利、公平を手に入れること、そして自立を目標に活動していること。自由にアイデアを出せるJENの風土も気に入っています。

私は、厳しい状況にある人びとが、持続的に平和に暮らす環境をつくることが、人びとの自立の道へつながると信じています。また、自立こそが人びとの援助依存を少なくし、自分たちの力で権利を主張できるようになり、ひいては子どもたちの未来を明るく照らすものになると信じています。

人びとが直面している厳しい避難生活には心が痛みます。将来、故郷に戻る事ができたとしても、全てが破壊されているために、一から生活を始めなければなりません。でも、どんなに厳しい状況でも、子どもの教育だけは置き去りにしないで欲しいと願っています。教育こそが、彼らの未来と命を守る唯一の方法なのですから。

私は、世界中の人びとが法の下に平等や権利、機会を得て、皆が笑顔で暮らせる世の中になることを願っています。この願いは結婚し2人の子どもを授かったとき、さらに強くなりました。JENの活動を通して、声なき声を世界中に届け、次の世代のためにも支援の手を止めることなく、努力していきます。

JEN パキスタン事務所
プログラム・コーディネーター
トゥフェール・アフマッド

トゥフェールさんへ

初めてトゥフェールさんにお会いしたのは、2005年のカシミール地震の被災者支援の時。不自由な生活をものともせず「被災された方々の為に」と、カシミールの山の中で献身的に働くトゥフェールさんの姿が今も心に深く刻まれています。一仕事終え、車で現場からイスラマバードに戻る道中、雪深い山中で雪合戦をしましたね。どんなに辛い状況でも、明るく支援してゆくというJENの精神が詰まった懐かしい思い出です。

お子さんが、2人も！まさに子どもたちは未来への希望ですね。世界情勢が厳しい中、困難に遭っても、それを乗り越える胆力と、正解が一つではない複雑な問題を解決する知恵が、私たちにも、子どもたちにも求められていますよね。トゥフェールさんのお子さんも世界中の子どもたちも、一人も取り残されずに良い教育を受けられるように、これからもそれぞれの場所で頑張りましょう！お元気で。

JEN事務局長 木山啓子

［左］昨年10月に発生した地震の被災者にインタビューするトゥフェールさん（1番右）

［右］2012～13年には避難民の生計を支えるため、ヤギの配布を行いました。（1番右がトゥフェールさん）

特定非営利活動法人 JEN Newsletter Vol. 64 2016年4月30日発行

皆さまからのご寄付は、寄付金控除の対象です。
最大で約40％が所得税の税額控除となります。

※控除額は寄付金額や年間所得額によって異なります。詳しくはホームページをご覧ください。

生きるちから マンスリーサポーター
あなたの毎月の支援で、世界の人びとの、生きる力をサポートします。

郵便局から
00170-2-538657
口座名 JEN

遺贈寄付
ご自身の財産や大切な方の遺産を、JENが支援する世界中の人たちへ、確実にお届けします。

インターネットから
クレジットカードでご寄付いただけます。
（VISA、MASTER、JCB、AMEX）

本誌掲載の記事、写真、イラストなどの無断転載は固くお断りいたします。

JEN
Japan Emergency NGO

特定非営利活動法人ジェン（JEN）
東京本部事務局

〒162-0824 東京都新宿区揚場町2-16 第二東文堂ビル7F
TEL：03-5225-9352 FAX：03-5225-9357

ホームページ
http://www.jen-npo.org
NPO JEN 検索

スリランカ

コミュニティのパワーで、もっと活気あふれる故郷に！

―スリランカの人びとの挑戦―

組合員のチームワークはこうした話し合いの中から生まれます。

今も残る紛争の爪痕

インドの南東、インド洋に浮かぶ人口2000万人余の小さな島国、スリランカ。昨年誕生した新政権は今年1月、メガポリス計画を発表し国の発展にむけた様々な制度改革を行っています。急速な発展を続けるこの国では、たった7年前まで民族間の対立を発端とした熾烈な紛争が繰り広げられていました。

「故郷に帰る事ができたあの日の光景を忘れることはありません。壊された家や井戸、荒らされた農地。持っていた農機具は全てなくなっていました」と、北部ムライティブ県に暮らすセルヴァクマールさんは語ります。

2008年、JENは南部での津波被災者支援を終え、津波と紛争の二重災害を被った東部での支援活動を開始。その後、終戦を迎えた'09年からは活動の範囲を北部にも広げました。現在は、北部で最も大きな紛争被害を受けたムライティブ県とキリノッチ県に帰還した人びとを対象に、農業用井戸の建設や農具・苗・種などの配布、そして農業協同組合（農協）と、井戸管理委員会の発足・運営サポートなどの活動を行っています。

しなやかなコミュニティをつくる

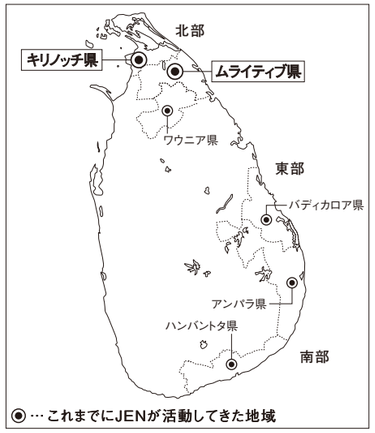
活動の中で、JENは生計手段の回復だけではなく、人やコミュニティが潜在的に持つ回復力（レジリエンス）を引き出し、その地域を紛争前よりも『もっと強いコミュニティにする』ことを目指しています。どんな課題に直面しても暴力で解決するのではなく、仲間同士で考え平和的な解決策を見出し、励まし合いながら辛い状況を乗り越えていける、しなやかな力をもつコミュニティです。

強いコミュニティにするために、私たちは地域住民によって形成される農協の活動をとても大切に考えました。まず、農協機能を確立する為にリーダー、サブリーダー、会計、書記を組合員自身が組合員の中から選びました。さらに、記録の取り方、会計方法、コミュニティの大切さなどを学ぶワークショップを行いました。

次に、新たな収入源をつくる事を目標に据え、農産物の加工品など"商品"を組合員が企画し、彼ら自身の手で製造販売する仕組みを作りました。人びとが共通の目標をもち話し合いを重ねることで、組合員同士のチームワークが強化されました。やがて、その絆は地域住民にも広がってゆき、どんな問題も共に協力しながら解決する『コミュニティの力』が強化されていくのです。

農協の活動を通して、組合員たちは行政や自治会組織との団体交渉の能力を身に付けます。それだけではなく最近では、農協の活動に賛同した行政が、活動拠点となる土地を中心部で確保し提供してくれるなど、官民一体で地域を盛り上げようという気運に包まれています。

更に、各地でサポートしたいくつもの農協間の交流会を定期的に行うことで、新たなネットワークが生まれ、スキルが波及しています。「私たちは未来への希望を取り戻しました」と自信に溢れた住民の声が聞こえています。人びとの声に励まされながら、これからもJENは北部での活動を続け、国の再建に貢献してゆきます。



◉…これまでにJENが活動してきた地域

○面積：6万5,607平方キロメートル（北海道の約0.8倍）○人口：約2,067万人（2014年）○首都：スリ・ジャヤワルダナプラ・コッテ○民族：シンハラ人，タミル人，スリランカ・ムーア人等○宗教：仏教徒，ヒンドゥ教徒，イスラム教徒，ローマン・カトリック教徒等（外務省HPより）

スリランカでは、シンハラ人を主体とした政府とタミル人武装勢力組織タミール・イーラム解放の虎（LTTE）による紛争が26年もの間続きました。その間、7万人以上の人びとが犠牲となり、80万人もの人びとが避難を余儀なくされました。その終結から7年以上が経ち、多くの国内避難民は紛争前に住んでいた故郷に帰還しました。一方で、地雷除去や土地の返還が遅れていたり、充分な支援を受けられず復興から取り残されている地域もあります。また近年、自然災害が毎年のように起きています。JENは、2004年に沿岸部を襲ったインド洋津波の被災者支援を機に、スリランカでの支援活動を開始しました。

現地の人びとの声

ヴィシュワマドゥ農協
ラマイヤ・スバマニヤンさん

収入が増えるにつれ、新しいスプリンクラーやホース、バイクなどを購入する家庭があったり、家の増築をすることができるようになった家庭もあるなど、様々な変化が見られます。今では私たちは、安定した平和な生活を送ることができています。

以前とは生活習慣も変わり、近所の方の催すお祝い行事などに参加することもあります。

課題に直面してもコミュニティ内で考え、解決策を見出す自信がつきました。紛争や避難先で家族や友人を亡くした私たちに、希望をもたらしてくれた日本の皆さんの支援に感謝します。

農協でのワークショップの後はみんなで楽しくランチタイム。

昨年設立した農協メンバーが、2013年に設立した農協を訪れました。知識や経験を共有し新しいネットワークが広がりました。

How to Make DRY FOOD

キリノッチのとある農協では、
ドライフードの商品化を目指して
新たな挑戦が始まりました。

乾燥機が農協に届きました。

さっそく茄子をスライスして、並べるのは運営委員の女性。

食べられる葉っぱも入れましょう。

この容器に木屑を入れ、踏みしめて固めます。

それを乾燥機の下に設置し、着火。

容器から熱風が昇り、乾燥機内の野菜などを乾燥させていきます。

30分後、ドライフードが完成しました！

更地だった再定住地域に作られた小公園は、仮設住宅から戻る子どもたちが利用し、親、地域の大人がそれを見守る、憩いの場になりました。

入居直後の仮設住宅で。花壇づくりイベントは、住民同士が知り合う機会になりました。

緊急時に派遣した泥だしボランティア。出身も年齢も国籍も多様でした。

ショベル、一輪車、長靴などをセットにした「泥だしツールキット」200セットを配布。石巻全域で利用していただきました。

『絆』の意味を5年目の今こそ見つめ直して

東日本大震災後、東北には、世界中の個人や企業など民間から寄付やボランティアが寄せられた。少なく見積もっても４０００億円を越える寄付と１５０万人のボランティアが集まったと言われている。行政の人や資金も莫大に投入され、かつてない規模での復興支援活動が展開された。がれきが撤去され、道路が復旧し、工場が再建された。災害公営住宅も２０１５年3月末で予定の6割の人びとに提供されたと言う。

一方で、被災した方々の7割近くが経済的に困っている、55％の方がうつ状態にある、また3割以上の持病が悪化し、4割が新たな病気をり患した、といった調査がある。心配なのは、住まいの見通しが立たず、将来の生活に安心感を持っていない人が、まだまだ存在するということだ。

そんな中で、興味深い調査結果がある。仮設住宅で集会所の利用頻度が高い住民ほど、将来の住まいの見通しが確定している割合が高い、また、仮設住宅、災害公営住宅ともに、集会所の利用頻度が高い住民ほど、生活安心度は高い、というものだ。

集会所を利用しない理由は、『東北の人たちは人見知り』というステレオタイプだけでは片づけられない。震災によってもたらされた分断があるからだ。家族を失ったか、いつ避難したのか、避難を余儀なくされたか、そうした違いが心につかえて、もしくは理解してもらえないと考えて、心を割って話せなくなったという。加えて、若い世代の流出、介護人材不足、漁業の停滞等、元々あった課題が震災後の厳しい状況により鮮明になり、分断を悪化させる。

東日本大震災以降、『絆』という言葉が語られ続けてきた。若干使い古された感すらあるこの言葉の本当の意味を、もう一度考えて実践するために、再びそれに向けて覚悟するために、この5年目という機会を活用することを提案したい。絆を結び直してしなやかに強化することができれば、人びとの安心感が高まる。安心感が高まれば、幸せな人生を送れる。その絆を結び直すことに現地で取り組む人たちを、東北に住んでいない私たちは応援できるはずだ。そのために、一人ひとりができることをやり、行動を起こす。歩きだし、変えていく力は一人ひとりの中にある。

ＪＥＮ事務局長
木山啓子

インタビュー

JENは岩手県、宮城県、福島県で活躍する団体とパートナーシップを結び、プログラムの更なる充実をサポートしています。
パートナー団体の1つ、石巻の『男の介護教室』代表河瀬さんにお話をお聞きしました。

男性介護者の心のよりどころに

『男の介護教室』は、身内の方が介護を受ける立場となった男性介護者を対象に開いています。

教室開催のきっかけは、私の勤める歯科に受診したご夫妻との出会いでした。そのご夫妻は、旦那さんが孤軍奮闘しながら奥さんを献身的に介護していました。ある調査によると日本の介護者の3割が男性という報告もあります。男性は悩みを抱え込む傾向がある上に、家事の経験が少ないので、包丁の使い方や料理にも苦労している事があります。その様な男性を対象に開いた教室には大きな反響がありました。

私がこの教室で大切にしたいことは、介護についての知識、技術の習得は基より、友達感覚で悩みを相談できる場になることです。参加者は一度話し出すと止まらないことも多々。皆話をしたかったのだと実感します。

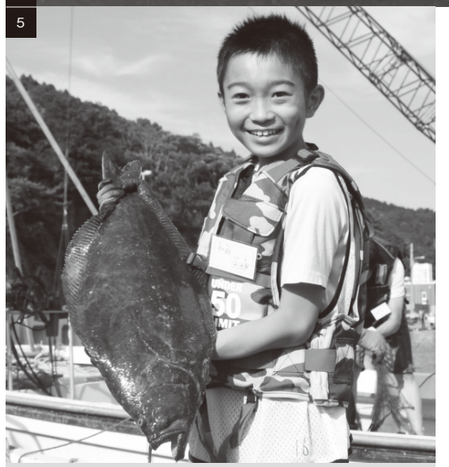
多くの参加者から「ずっとこの教室を続けて欲しい」という声があがっています。この教室が介護者の心の拠り所になっていると感じています。今後、全国にこの教室を広げてゆきたいと思っています。

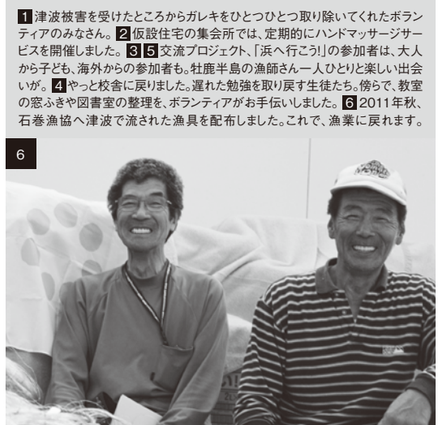
「男の介護教室」代表 河瀬聡一朗 さん

行動を起こし変えてゆく力。

―震災から5年。今、私たちにできること―

２０１１年3月、ＪＥＮは震災発生直後から宮城県を中心に避難所での炊き出しや物資配布、家屋の泥だしなどの緊急支援活動を開始。その後、収入の回復や被災された人びとの心のケア、コミュニティの再生など、ニーズに柔軟に対応した支援を行ってきました。5年が経った今、ＪＥＮは宮城のみならず、岩手、福島を加えた3県を対象に復興支援活動を続けています。





1 津波被害を受けたところからガレキをひとつひとつ取り除いてくれたボランティアのみなさん。2 仮設住宅の集会所では、定期的にハンドマッサージサービスを開催しました。3 5 交流プロジェクト、「浜へ行こう!」の参加者は、大人から子ども、海外からの参加者も。牡鹿半島の漁師さん一人ひとりと楽しい出会いが。4 やっと校舎に戻りました。遅れた勉強を取り戻す生徒たち。傍らで、教室の窓ふきや図書室の整理を、ボランティアがお手伝いしました。6 2011年秋、石巻漁協へ津波で流された漁具を配布しました。これで、漁業に戻れます。

ヨルダン

ザータリ難民キャンプの子どもに安心して遊べる場所を。

ザータリ難民キャンプでは、上下水道の整備が進んでいます。当初、設置していたトイレやシャワー等、住民が共同で使っていた施設が不要となったため、その敷地を子どもたちのために活用できないか、検討を重ねてきました。そして、JENは地域コミュニティと協力して、子どもたちが元気いっぱいに安心して遊ぶことのできる広場を作ることにしました。

まず、もともとあった古い壁に使われていたブロックを再利用し、広場の周囲に積み上げて塀を作りました。次に、住民総出で明るい色に塗装し、子ども達は楽しく思い思いに絵を描きました。さらに、遊具を調達し、ブランコや滑り台を設置しました。

ふるさとには沢山あった「近くの公園」。一方キャンプには、遊ぶスペースがありませんでした。広場の完成に、道端で車をよけながら遊んでいた子どもたちは大喜び！放課後には、大勢の子どもたちが元気いっぱい楽しい時間を過ごしています。大人たちもまた、子どもたちの安全な居場所ができたことを喜んでいます。そればかりか、広場にいる子どもたちを見守り、そこがいつも安全で清潔に保たれるよう気を配ってくれています。

子どもたちが喜んでいる姿を見て、コミュニティの大人たちは、私たちに感謝の言葉をかけてくださいます。JENは今後もこの活動を広げるとともに、子どもたちが集う機会を利用して、衛生教育も盛んに行う予定です。こうした活動が、子どもたちの病気やけがを防ぎ、元気溢れる子どもたちの姿に、大人たちが勇気づけられることを願っています。（文：アイッド・アル・マサイッド）

共同シャワーの跡地にできた公園。
子どもたちの楽しそうな声がひびきます。

コミュニティや子どもたちと協力して
堀にペンキを塗りました。

イラク

楽しかった日々を取り戻したい。
―バグダッドに避難する少女の願い―

私はバグダッドの小学校に通うマリアム、6年生です。出身はアンバール県です。家族は、両親と10人の兄妹がいます。大家族だってびっくりしましたか？故郷のアンバールでは、私たち家族は両親が所有する大きな家に住んでいて、私は近くの学校に通っていました。近くに住むいとこも仲が良く、一緒に遊んだり、パーティを開いて、お互いの家を行き来していました。

ある日突然、私たちの平和な町は武装勢力によって危険にさらされ、私の夢も希望も消えてなくなってしまいました。町からほんの数十メートル先に戦火が上がった頃、私の家族と叔父一家はバグダッドへ避難することを決心しました。その数日後、町は武装勢力に占領されました。

今は、私の家族13人と叔父家族7人が、家賃を節約するために小さな家を借りて一緒に暮らしています。家は狭く、まるでお仕置き小屋に住んでいるみたいです。毎日楽しくて何の心配もなかったあの頃が懐かしいです。今は不安と悲しみで一杯です。今どこでどうしているのかわからない友達や、連絡のとれないいとこのことをいつも思い出します。ちゃんと逃げられたかな、どうしているんだろう。

バグダッドでは、学校から帰るとお母さんのお手伝いをしてから、宿題をします。外には出かけないようにしています。同級生はバグダッド市内の公園に遊びに行くそうです。市内もあまり安全ではないけれど…。

元の家に、学校に戻りたい。あの頃の楽しかった生活を取り戻したい。そして、他の国の子どもたちと同じように、安全でなにも心配のいらない生活がしたい。私は大それた夢をもう持っていないけど、ほとんど壊されてしまった私たちの町が、いつか元通りになることを願っています。

JENが衛生教育支援を行っている小学校に通うマリアム。

イラクでの衛生教育の様子。

アフガニスタン

みなさまのご支援、ありがとうございました。
―アフガニスタン・パキスタン地震―

2015年10月26日にアフガニスタン北部を直撃したマグニチュード7.5の地震により、国内だけでも115名の方が亡くなり、524名の方が負傷、1万8545棟が損傷・倒壊するという甚大な被害に見舞われました。30年以上続く紛争のため、公的サービスが市民に行き届いていない中でこのような地震が発生し、被害を受けた方々はあらゆる面で困難な状況に置かれています。JENは、中でも被害の大きかったバダフシャン県キシュム地区の625世帯を対象に暖房器具や石炭、薪など越冬のためのセットを配布しました。担当したスタッフは震災前から同国で支援活動を行っているため、今回の緊急支援の出動にも迅速・的確に対応することができました。支援活動が終了した後の家庭訪問では、全ての家庭が薪や石炭のストーブを使用して、暖を取るだけではなく、食事を作るなど、支援物資を有効に活用していることも確認できました。物資を受け取ったカリマさんは、「暖をとることができるようになり、厳しい冬を越す準備ができました。素早く冬の生活に必要な物資を届けてくださった支援者の皆様には、心から感謝しています」と笑顔を見せながら語ってくれました。

ストーブや石炭など、越冬のためのセットが被災された人びとに届けられました。

JENフレンド
活動記

命の大切さを伝えたい！

3月11日、東日本大震災が起きたこの日に、地元・札幌の小学校で「命の大切さ」を伝える出前授業をおこなっている筒井哲雄さん。授業の題材はJENの東北とヨルダンでの活動です。今年で2回目の開催になりました。筒井さんとJENとの出会いは3年前、同僚とともに、石巻の活動にボランティアとして参加したことでした。

その後、シリア難民の状況に関心を持たれた筒井さんは、会社の社会貢献クラブの仲間8名とヨルダンを訪問、難民キャンプとホストコミュニティで行っているJENの活動を視察しました。難民キャンプでは子どもたちが日頃の活動の成果を披露するイベントを見学し、ホストコミュニティでは、シリアとヨルダンの子どもたちが共に学ぶ3つの公立学校を訪問し交流会を開きました。

筒井さんは帰国後、卒業前の小学6年生へ命の大切さを伝える活動を始めました。今年の出前授業に参加した64名の生徒たちの心にも、その想いが大きく響いたようです。生徒の感想文はJENのフェイスブックでご紹介していく予定です。ぜひご覧ください。

Join Us!

JENフレンド募集中！

世界中で厳しい状況にある人びとを支えるために…
あなたができる小さなアクションを始めませんか？
学校で、サークルで、町内会で…あなたのコミュニティで
JENの活動を広げる『JENフレンド』を募集中です！
くわしくは、jen.jnfo@jen-npo.org（担当：広報）まで。

2015年冬募金へのご協力、ありがとうございました！

〈 歳末募金合計 〉
3,000,947円

頂いたご寄付は、JENが世界6か国で実施する活動費として大切に使わせていただきます。
ご協力くださった皆様へ心より感謝申し上げます。
ありがとうございました。

好きな金額で少しずつ、をずっと。
「生きるちから マンスリーサポーター」募集

支援してみたいと思ったその日から、1日50円～で始められるプログラム。
お申込みは、JENのWEBサイトから。

JEN 生きる力　検索　http://www.jen-npo.org/monthly/